農業協同組合新聞 2014.3.10.号

2/28 於 福岡、シンポジウム
"つくる"と"たべる"のコラボレーション

第2221号

基調講演

蔦谷栄一・農的社会デザイン研究所代表

シンポジウムでは元農林中金総研特別理事の蔦谷栄一・農的社会デザイン研究所代表が基調講演。かつて都市化・近代化とは農地をつぶしていくことであり「都市＋農業」とは矛盾する姿だった。しかし、時代変化のなか農業に関心を持つ〝都市〟の若者層が増えるなど、蔦谷氏は「日本農業再生の鍵を握るのは都市農業だ」と強調した。

各国がどう農業を発展させようとしているのかをみると「それぞれの地域特徴を出そうとするのが世界の流れ」と指摘。EUは地理的表示（＝地域ブランド）や家畜福祉などにこだわり、なかでもイタリアは農業と食のつながりを重視。アジアでは韓国が「親環境農業」（＝有機農業）を推進している。

コミュニティ農業で共生をめざせ

ところが、日本の農政改革は規模拡大による競争力強化一辺倒である。蔦谷氏は、食料安保の観点から穀物を作る水田農業を守るとともに、日本の特質を生かす視点が日本農業には必要だという。

その特質とは▽1時間も車で走れば風景が変わる「豊富な地域性と多様性」、▽きわめて高い農業技術、▽高所得で品質・安全安心に敏感な大量の消費者の存在、▽都市と里山とのきわめて近い時間・距離などだ。

こうした特質をそれぞれの地域が生かした「地域農業の複合体こそ日本農業の姿」であり「その核になるのが都市農業」と蔦谷氏は強調した。

一方、こうした都市農業の維持・振興が求められる背景には、人々が新たな価値を模索し始めたこともある。蔦谷氏は「贈与」と「身体性の回復」がそのキーワードだという。贈与とは「すべてをお金で割り切る経済の対極にあるもの」。人々はお金では得られないものをコミュニティに求めており、それは「人と人との関係」だ。

また、身体性の回復とは「自然を体に感じること」。まさにバーチャルな世界に取り囲まれている身体からの脱却であり、農業体験はその望みをかなえる営みだといえる。蔦谷氏はこうした時代の変化をみすえ、新たな価値を共有した生産者と消費者が一緒になって支えるコミュニティ農業の姿に都市農業の重要性があることを強調した。同時に消費者を巻き込んだ都市農業振興は「農協批判への反論にもなる」として、消費者を巻き込んだ農協運動が今後重要になるとも語った。